

平成28年度
入学試験問題

国 語

特待生
後期

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字になおして答えなさい。

- (1) 春になり農地をコウサクする。
- (2) 外国製品のバイバイ。
- (3) ここはあやまるのがトクサクだ。
- (4) 電車がケイテキを鳴らす。
- (5) 私の方にイロンはない。
- (6) 主人にフクジュウする。
- (7) 会議をリンジに開く。
- (8) 試合時間がノびる。
- (9) 計算式をノートに書きウツす。
- (10) アメリカ留学をココロザす。

〔二〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本

文を改変、省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

題詠とは、読んで字のごとく、^①題を与えられて歌を詠むことである。長いあいだ私は、題詠なんてツマラナイ、と思っていた。

それは、なぜ歌を詠むのか、というとても基本的な問題と関わってくる。小さなことでも、大きなことでも、何かしら「あっ」と心が揺れるようなことがあったとき、人は I と思うのではな

いだろうか。この感動をなんとか言葉にしたい、という気持ちが、歌を詠むことの原点にはあるはずだ。

何を詠むか、の次にくるのが、どう詠むか、という問題。「何を」と「どう」は、作歌の二大ポイントと言っている。

つまり題詠では、二大ポイントのうちの一つ「何を詠むか」が、あらかじめ決められていることになる。感動もしていないのに、これこれこういう題で歌を作れと言われて、はいはいそれじゃあと詠むなんて、^②まことに嘘くさい。

何を詠むか、というところから、すでに作歌は始まっているのである。題なんて大きなお世話なのだ。ほっといてほしい。……と、別に題を出されたわけではないけれど、私は題詠というものに対し

ては、そうとう腹が立っていた。

短歌史の上から言うと、題詠が急激に盛んになるのは、十二世紀

ごろ。歌合の隆盛にもなったことだった。歌合とは、右チームと左チームに分かれて、歌を一首ずつ出してゆき、その優劣を競いあうもの。合計の勝ち数の多いチームが、優勝ということになる。

歌の勝敗を決める役を判者**a**といった。どちらが優れてるか**b**を判定する場合、右からは恋の歌、左からは桜の花の歌、というような組合せになったとしたら、判者は非常に困っただろう。テーマが全然違うのだから、比べようがない。絵画でいえば、人物の描かれたものと風景画とを比べるようなもの。そこで、なるべく厳密に歌の優劣がわかるように、テーマの統一が行われた。それが「題」である。同じリンゴの絵が描かれていれば、どっちがうまいか下手か見分けやすい、というわけだ。

「何を」はひとまず置いて「どう」歌うかで腕を競いあう、それが歌合なのである。何だか、^③注文を受けて工芸品を作る職人のようだ。人を感動させるというよりも、人を感心させる技。もちろん、この技なくしては「どう歌うか」という段階をクリアできない

わけであるから、とても大切なことだとは思う。が、それにしても、恋なんかしていない人が「忍ぶ恋」の歌を作ったり、^④実際の景色を見ないまま、どこかの風景を詠んだりすることは、むなししいのでは

ないだろうか。

と・こ・ろ・が、である。ここに私を迷わせる、一つの動かし難い事実がある。

「題詠から生まれたものの中に、すごくいい歌がある」ということ。

「なるほど、うまい」という感心ではなく、心から感動してしまう作品が、いくつもある。そう思わせるのも技のうち、なのだろうか。

そんな大嘘つきの歌人が、何人もいたのだろうか。歌わずにはいられない切実さや、深くしみじみとした情緒^{じょうちよ}まで、にじみ出させる

ことができるとしたら、私は技というものを侮^{あなど}っていたことになる。

が、真相は「X」にあるのではなく、やはり「Y」にあるのではないかと思う。題詠の名を借りて、実は自分の心情を吐露^{とろ}していた歌人が、何人もいたのではないか。そう考えるほうが、大嘘

つきが何人もいたというより、自然な感じがする。

A しのはれど色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで

平兼盛^{たいらのかねもり}

心に秘^ひめていたけれど、知らず知らずのうちに顔に出してしまった

ようだ、私の恋は。「何か、もの思いでもしているの？」と人から

問われるほどに……。

深い大きなため息を、そのままつかまえて歌にしたような一首で

ある。技巧^{ぎこう}らしい技巧も使われていない。「ものや思ふ」の直接話

法が効いているけれど、これは技巧というより、実際そういうふう

に聞いてくる友人がいたのだなあと思わせる。その友人の言葉に触^ふれて、はっとしたところから、作歌がスタートしたのではないだろ

うか。ああ、私はこんなにも恋をしている。頭では隠^{かく}そうと思って

も、心は隠しきれないのだ……。ア

壬生忠見^{みぶのただみ}

B 恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか

「あいつ、恋をしているらしいぞ」——早くもそんな噂^{うわさ}が立って

しまった。人知れず思い初めていたつもりだったのに……。この歌にも、ほとんど技巧は使われていない。恋をしているらしい、という噂にドキッとした自分の心がきっかけで、生まれた一首

という感じがする。状況^{じょうきやう}としては、平兼盛の歌と似ているけれど、

噂によって恋が何らかの影響^{えいぎやう}を受けてしまうのではないか、という不安までが、こちらの歌には詠みこまれている。イ

実はこの二首は、天徳四（九六〇）年に村上天皇^{てんのう}の御前^{ごぜん}で催^{もよお}された「天徳内裏歌合^{たいり}」で「忍ぶ恋」の題のもとに番えられたもの。[※]

「当時から名勝負として有名だった。判者の藤原実頼も困ってしまい、そつと村上天皇の様子をうかがった。天皇もどちらとはおっしやらなかったが、兼盛の歌を何度か口ずさまれた。そこで、兼盛の勝ちになったと伝えられている。」

ウ

80

以来、短歌史上でも、どちらを勝ちとするか、時代を越えて論議されてきた二首でもある。私自身は、昔はだんぜん兼盛の歌が好きだった。歌いかたが、より素直だし、「ものや思ふ」の直接話法が、生き生きとしたリズムを生み出している。

エ

が、最近では壬生忠見に鞍がえをしてしまった。先ほども書いたよ

85

うに、忍ぶ思いがバレることによって、恋が否応なく受けてしまう影響についてまで、思いを馳せている点、こちらのほうが、より複雑で一枚上手なのではないかと、思うようになったのである。

オ

噂というのは怖い。それは時に事実より先行し、現実の恋の流れ

を、変えてしまうことだってある。早い話が、芸能人のゴシップ。

90

ほんとうにいい友たちとしてつきあっているのに、早々と「結婚か」なんて書かれたら、お互い気まずくなってしまいうだろう。噂にならなければ、いい関係が続けることができたかもしれないのに、噂のために、まとまる話もまとまらなくなってしまふことだってあるのだ。

——というようなことを、あるとき友だちに言ったら、彼女はま

95

るで反対の意見だったので、びっくりした。

「あら、ほんとうに好きな人だったら、噂されるのは、悪い気しないわ。私なんか噂を立ててほしいぐらいよ。そうすれば、それが刺激になって、なんとなく意識しあって、ただの友だち関係から一歩進めるかもしれないじゃん。むしろ困るのは、別に好きでもな人と噂になることよね。ムキになって否定すると、相手に悪いでしょう」

100

なるほど。そういう目で、もう一度壬生忠見の歌を読みかえしてみると、困ったなあという顔をしながらも、スリリングな展開を期待している嬉しさが、感じられなくもない。

105

ところで、この素晴らしい二首が、ともに題詠のもとに生まれたものであるという事実。それを、どう考えるか。私はたぶん、作者は二人とも「忍ぶ恋」の経験者ではないかと思う。あるいは、そのとき、恋をしていたのかもしれない。

110

本当に人目を忍ぶ恋ならば、歌にして発表するなんて、やぶへびもいいところ。が、題を与えられたという大義名分があれば、思いきり切ない心情を語ることができる。題を与えられることによって、かつては言葉にできなかった思いが蘇る、ということもあつたらう。もし、題がなかったら、永遠に言葉にはならず終わっていたかもしれない思いたち。それが、日の目を見る。題によって触

115

発される思いが、歌人の心のなかにある場合、題詠というシステム

は、力を発揮するのではないかと思う。

(俵万智『短歌をよむ』)

※忍ぶ恋……秘密にする恋。

※吐露……心の中の思いをかくさず述べること。

※番えられた……ここでは左右からそれぞれ歌を出されたというよ

うな意味。

※触発される……感情がさそい起こされること。

問一 —— 線①とありますが、「ごとし」を使った次の慣用表現

にあてはまる漢字一字をそれぞれ答え、さらにその意味として正しいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) 光陰 () のごとし

(2) () ギたるは猶及ばざるがごとし

ア、何事もほどほどが大切に適度が良いということ

イ、いざごごの後でかえって良い結果になること

ウ、中途半端で何をするにも役に立たないこと

エ、何がなんだかわけがわからないということ

オ、年月がたつのが非常にはやいということ

問二 I に入る言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア、感動を共有したい イ、歌を詠みたい

ウ、頭の中に留めたい エ、心に秘めたい

問三 —— 線②とありますが、筆者は題詠のどのような点が「嘘

くさい」と言っているのですか。「原点」という言葉を入れて六十字以内で答えなさい。

問四 〓 線 a・b と同じ構成の熟語を次からそれぞれ選び、記

号で答えなさい。

ア、救助 イ、消火 ウ、往復 エ、温水 オ、不明

問八 A・B の歌に共通して使われている表現技法を次から選び、

記号で答えなさい。

ア、体言止め イ、反復法 ウ、擬人法^{ぎじんほう} エ、倒置法^{とうちほう}

問五 〓 線③とありますが、「注文」、「工芸品」、「職人」はそ

れぞれ何をたとえたものですか。本文中からそれぞれ一語でぬき出して答えなさい。

問九 本文には次の一文がぬけています。どこに入れるのが最も適

切ですか。本文中の ア ウ オ から選び、記号で答えなさい。

そこが違いの一つだろう。

問六 〓 線④とありますが、筆者がこのように言うのは、筆者

が歌合をどうとらえていたからですか。それを説明した次の文の空らんに入る内容を、本文中から二十五字以内でぬき出して答えなさい。

歌合は題が決まっております、「何を」歌うかというポイントが
はずされているため、

を競いあうものである。

問七 X、Y に入る語をそれぞれ漢字一字で答えなさい。

問十 ～～～線x「鞍がえ」、y「やぶへび」の本文における意味

を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

x「鞍がえ」

ア、急に興味を失ってしまうこと

イ、それまでとは別のものにかえること

ウ、事情が色々と変わり続けること

エ、他のことには見向きもしないこと

y「やぶへび」

ア、余計なことをしてかえって悪い結果をまねくこと

イ、名誉を傷つけ、思ってもみない恥をかくこと

ウ、せっかくの努力や苦勞が結局はむだになること

エ、よく考えもしないで、軽はずみに行動すること

問十一 ———線⑤とありますが、筆者はどういうことを言っているのですか。次の言葉に続くように四十字以内で答えなさい。

題を与えられることによって ()

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

「私(マユ)」の「バーバ(祖母)」は、自分の娘である「ママ」

のことも、孫の「私」のことも忘れてしまった。今はホームに入居した「バーバ」について、「ママ」は、おばあちゃんはもう子供

に戻ったんだから、はなちゃんと呼べと言っている。「ママ」は手作りのお弁当をホームに持って行って「バーバ」に食べさせようとするが、「バーバ」は全く食べようとしな

私は、お人形遊びをするように、バーバの白い髪の毛をもてあそぶ。バーバの髪の毛をいじることを、ママはあまり良しとしない。

でも私は、そうされている時のバーバはとても気持ちよさそうだと

感じている。今日は、髪の毛を左右二つに分けて、三つ編みに結んでみる。本当に、柔らかくてお人形みたいだ。私が持っているカラー

ゴムで、左右の端を結んであげた。そして、私は耳元で囁く。

「バーバ、おなかすかない? 私のキャラメル、食べる?」

ママの言い方が移って、幼い子供に話しかけるような口調になった。

私は、箱からキャラメルを一つ取り出し、紙を剥いてバーバの口元に持って行くこうとする。と、その時、バーバの口元が

1 緩

んで、かすかに「ふ」という音がした。

「ふ？ ふって何？ このキャラメルは、熱くないから、ふーふーはしなくていいんだよ」

バーバが何かに反応したことに慌ててしまい、早口になった。けれど、いざ私がキャラメルをバーバの口に入れようとする、バーバはまた **2** くちびるを閉ざしてしまふ。

「はい、あーん」

ママと同じ、甘ったるい声になった。すると今度は、バーバの右手が **3** 伸びて、窓の向こうを指差す。普段は直射日光が眩しいので、薄い方のカーテンは閉めたままだ。

「お外、見たいの？」

しっかりとバーバの目を見て尋ねると、バーバはまた、「ふ」という音を漏らした。

じゃあ、ちょっとだけだよ、そう言って、私はバーバの寝ているベッドを離れ、窓辺に移動する。それから、カーテンを開けた。その時、

「バーバ、もしかして、ふって富士山の、ふ？」

ふとひらめいたのだ。その瞬間、バーバの薄曇りのような色の奥まった瞳が、ピカッと輝いたように見えた。

あまりにも当たり前に存在するので見慣れてしまい、忘れそうになっているけど、私達が暮らしている町からは、富士山がよく見える。

昨日まで大雨が降っていたから、空気がいつもより澄んでいるのかもしれない。富士山は、ホームの窓から見える景色の中で、しっかりとした輪郭を現わしている。

「これでいい？ バーバ、富士山が見たかったんだね」

カーテンを開けたせいで、ますます心地よい風が流れ込んでくる。ママは、すっかり眠っているらしい。けれど、まだバーバは、「ふ、ふ」とかすかな息を出す。マユならわかってくれるでしょ、と訴えかけるような表情で。

「見えない？ ほら、よく目をこらすと、向こうに、富士山、見えるでしょ」

バーバは口元をほころばせ、くちびるをパクパクと動かしている。

「ん？ おなか空いた？ やっぱりキャラメル食べてみる？」

そう言いかけた時、何かを思い出しそうになった。バーバのこの表情を、いつかどこかで見たことがある気がしたのだ。いつだっけ？ バーバの、はにかむような柔らかい表情。

あつ、そうだ。何年前かに家族みんなで、かき氷を食べに行った時だ。並んで並んで、やっと噂のかき氷にありつけた時、バーバは、言ったのだ。ほーら、マユちゃん、富士山みたいでしょう、って。

① あ、そうか、そういうことか！！

「バーバ、わかった、少し待ってて。マユ、かき氷買ってきてあげ

るから！」

A 私が騒々しく部屋を出て行くとした時、

ママが目を覚ました。

「マユ、どこ行くの？」

眠そうな気だるい声で尋ねるので、

「バーバ、富士山が食べたいんだよ、絶対そうだよ、だから今」

そう言いかけると、

「富士山？」

ママは、不思議そうに本物の富士山の方を見つめる。

「だから、何年前か前、みんなでかき氷を食べに行っただじゃない。あれだよ、あそこのなら、バーバ、食べられるんだって」

「だって、あの店は」

「わかってる！ でも、行くしかないでしょっ！」

B けれど、そうしている間にも、バーバの体

が変化していくようで怖かったのだ。私は、ホームに置いてあるク

ラーボックスを肩に担ぎ、猛然と部屋を飛び出した。廊下を走りな

がら、バーバが受け付けなかったキャラメルを、口の中に放り込む。

駐輪場に停めてあった自転車にまたがり、かき氷店を目指した。

大雑把に言うと、そこは、かつて家族三人で暮らしていた町の方角

にある。 C ただ、パパの車で通った時の記憶だ

70

65

60

55

から、交通量も多い幹線道路を走らなくてはいけないけど。

夏休みで連休のせいとか、車がかなり渋滞している。私は、臨機

応変に歩道と車道を交互に走った。ぐんぐんと富士山が迫ってくる。

急がなきゃ、急がなきゃ、気がつくとき、猛スピードで走っていた。

D

何かアクシデントが起きても不思議じゃなかったけど、何も起き

ずにかき氷の店まで辿り着く。でも、やっぱりここも、ものすごい

人だかりだ。店の前に、長い行列ができています。どうしたら良いの

だろう。このまま待っていたら、夜になってしまいかもしれない。

私は、一心に店の奥へと突き進んだ。

「すみません」

勇気を振り絞り、窓の所で四角い氷を機械で削っているおじさん

に声をかけた。でも、周りが騒がしくて聞こえなかったのか、無視

されてしまう。

「すみません！」

二度目は、声を強くした。ようやくおじさんが、できたての氷の

山に透명한シロップをかけながら私の方を見てくれる。けれど、そ

の先の言葉が繋がらない。私はみるみる泣きたくなった。ただ、バー

バにかき氷を食べさせたいただけなのに。どうしてこんなに悲しくなっ

てしまうのだろう。けれど、早く言え、と何かが私の背中を強い力

90

85

80

75

で前に押してくれたのだ。

「バーバが、いえ祖母が、もうすぐ死にそうなんです。それで最後に、ここのかき氷を食べたいって」

ぐっとくちびるを噛みしめ、涙の落下を食い止める。一瞬、音

という音が世界から消えた。どうしてそんなことを口走ったのか、

自分でもよくわからなかった。ママとの会話でも、ずっと気をつけ

て避けて通ってきた、一文字の単語。それが口をつけて出たことに、

自分でも驚いてしまう。

「ちよっと待ってて」

子供の言葉など相手にしてくれないかと懸念していたのに、おじ

さんはぶっきらぼうにそう言うと、またくるくと機械のレバーを

回し始めた。目の前のカップに、白い氷の山ができていく。私は、

ポケットから小銭を取り出した。かき氷一杯は買える。おじさんは、

氷の小山の上から、透明なシロップをうやうやしくかけた。それを、

クーラーボックスの中に入れてくれる。

「ありがとうございます！」

お金を払い、深々と頭を下げて、その場を立ち去った。

帰り道は、ますますスピードを上げて自転車を走らせる。クーラー

ボックスの中の小さな富士山が溶け出す前に、どうしてもバーバに

届けなくてはならない。

110

「ただいま。バーバ、富士山、持ってきたよ」

ホームに戻ると、またカーテンが閉じていて、部屋全体が餡色に

見える。クーラーボックスから、急いでかき氷を取り出した。もし

全部溶けてしまっていたらと想像すると

たけれど、かき氷は、少し縮んだように見えるだけで、きちんと富

士山の形を留めている。私は、ママにかき氷を手渡した。

「はーなちゃん、あーん」

ママはそう言いながら、バーバの口元に木製のスプーンを差し出

す。バーバのくちびるは、うっすらと開いている。けれど、スプー

ンが滑り込めるほどの隙間はない。

「マユが、一人で買いに行ってくれたんですよ」

ママの瞳から、つるんと一粒の涙が落ちる。やがてバーバは、何

かを言いかけるように上下のくちびるを広げると、スプーンを受け

入れた。

「おいしいでしょう？」

ママの声が湿っている。二度、三度と、バーバはスプーンの上の

かき氷を吸い込んだ。そのたびに、目を閉じてうっとりとした表情

を浮かべる。

私は確信する。バーバは今、数年前の夏の日、家族で行ったかき

氷店のあの庭に帰っている。ごくろ、と喉が鳴って、富士山の一部

130

100

105

120

125

115

が、バーバの体の奥に染み込んでいく。私は窓辺に移動して、カーテンをかきわけ外を見た。富士山が、オレンジ色に光っている。すると、マユ、とママが呼ぶ。

振り向くと、ほら、バーバがマユにも食べさせたいって、と、私を手招いている。驚いたことに、バーバは自分で木のスプーンを持っている。

近づくと、私の口にかき氷を含ませてくれた。同じように、ママの口にもかき氷を含ませてくれる。③ママは明らかに、私よりも年下の少女の顔に戻っていた。

「おいしいねえ」

舌の上のかき氷は、まるで冷たい綿のようだ。さーっと溶けて、消えてなくなる。体のすみずみにまで、爽やかな風が吹き抜ける。

「眠くなってきちゃった」

そのままバーバのそばにいたら、泣いてしまいそうだったのだ。簡易ソファへ移動した。ママの前で泣くなんて、かっこ悪い。

「軽い熱中症かもしれないから、そこで少し休みなさい」

ママが、威厳たつぷりに命令する。バーバとママ、二人の世界を邪魔しないよう、横になってそっとまぶたを閉じる。

④再び目を開けた時、部屋の中があまりに静かで、胸がどきゅんと真っ二つに折れそうになった。天井が、虹色に輝いている。もし

150

145

140

135

かして……。私は起き上がって一歩ずつベッドに近づいた。バーバの隣に、目をつぶったママがいる。私はバーバの鼻先に手のひらを翳した。よかった。バーバは、生きている。

(小川糸『あつあつを召し上げれ』より「バーバのかき氷」)

問一

1 3

に入る言葉を次からそれぞれ選び、記

号で答えなさい。

ア、だらりと イ、すーっと

ウ、ふわりと エ、きゅっと

問二

——線①とありますが、私(マユ)には何がわかったとい

うのでしょうか。四十五字以内で答えなさい。

問三

A D

に入る文を次からそれぞれ選び、記号

で答えなさい。

ア、道なら覚えている。

イ、じれったくなり、つい乱暴な声を出してしまう。

ウ、体が、風の一部になってしまいそうだった。

エ、気がつくとき、大声で叫んでいた。

問四 ―― 線②とありますが、この「一文字の単語」とは一体何を指すか、答えなさい。

問五 ―― 線アの言葉の意味を次から選び、記号で答えなさい。

- 1、おおげさに
- 2、ていねいに
- 3、いいかげんに
- 4、たくさん

問六 Xに入る、体の一部を表す言葉を漢字一字で書きなさい。
い。

問七 ―― 線③とありますが、「私」の目には「ママ」がどのように映っていたのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、マユが一人で買ってきたかき氷をバーバに食べさせてもらい、一人前になったマユにすっかり安心しきっている。
- イ、三人で一つのかき氷を分け合って食べることで、数年前に行った家族旅行の時間を思い出し、当時を懐かしんで幸せな気分にならしている。
- ウ、マユと自分にかき氷を食べさせてくれるバーバの姿にバーバの容体が回復していることを実感し、うっとり夢見心地になっている。
- エ、かつて元気だったころのようにスプーンを持ってかき氷を自分の口に含ませてくれるバーバの前で、まるで幼いころにもどったかのように甘えている。

問八 ―― 線④とありますが、「……」のところに入る言葉を自分で考えて入れなさい。

問九

もし「バーバ」が話すことができたとしたら、「ママ」や「マユ」にどのような言葉をかけると思いますか。あなたの考えを書きなさい。